

あの日が近くなった日

長与町立長与中学校 2年
岡本 宗士

僕は、原爆の被爆地である長崎に住んでいます。だから小さいころから平和について学ぶ機会が多く、学校の授業や原爆資料館、平和祈念公園などで過去の戦争についての知識を重ねてきました。しかし、当時の人がどんな気持ちで日々を過ごしていたのかを想像することは難しく、いつも自分の生活から遠い世界の出来事のように思っていました。

そんな僕の考えが大きく揺さぶられたのは、中学2年生になり、昭和館のオーラルヒストリーを見て作文を書くことになった時です。数ある映像のなかで、僕は半藤一利さんの語りを選びました。半藤さんは東京で空襲を経験した方で、語られていた当時の年齢は十四歳。ちょうど今の僕と同じ年齢でした。

映像の中で半藤さんは、空襲のあと、焼け跡で亡くなった人の遺体を運ぶ手伝いをしたと静かに語っていました。十四歳の少年がそんな過酷な体験をしていたという事実は、僕にはとても信じられませんでした。自分がその場にたたされていたとしたら、何ができたのかと想像するだけで足がすくみました。

さらに印象に残ったのは、半藤さんが「自分は“絶対”という言葉は使わない」と話していたことです。“絶対”という言葉は物事を一つの考えに閉じこめてしまい、他の可能性を見えなくしてしまいます。半藤さんは、当時絶対勝利や絶対大丈夫と思っていたけれど、全部嘘だったと語っていました。僕はその姿に経験だけではなく、生き方としての力強さを感じました。

映像を見終わったあと、僕はただの昔の話として聞いていた戦争が急に自分のすぐそばにある現実のこのように思えて、しばらく動くことができませんでした。僕は学校に行き、友達と笑い、家で安心して眠る毎日を過ごしています。しかし、同じ年齢の半藤さんは、空襲の恐怖と向き合いながら、亡くなった人たちと向き合わざるを得ない日常を生きていたのです。

これまで僕は「日本ではもう戦争は起こらない」とどこかで思い込んでいました。でも、世界では今も紛争が続き、平和が壊れてしまう瞬間をニュースで何度も見えています。もしも日本でも同じようなことが起きてしまったら、と考えると胸がざわつき、言葉にできない恐ろしさを感じます。けれどその怖さから逃げてしまえば、過去の悲劇と同じ過ちを繰り返してしまうかもしれないとも思います。

だから僕は、半藤さんの言葉を思い出しながら、物事をひとつの考えに決めつけず、自分の頭で考えつづけたいと思います。そして、平和の尊さを学びながら、いつか自分の言葉で誰かに伝えられる人になりたいと思います。過去の出来事を自分の未来につなげるからこそ、今を生きる僕にできる小さな一歩だと信じています。

審査員からのコメント

【関沢まゆみさん・国立歴史民俗博物館教授】

昭和館の「オーラルヒストリー」で、半藤一利さんが自分と同じ14歳の時に、空襲後、遺体を運ぶという過酷な体験をしたと知り、自分がその場にいたら何ができたのかと想像するだけで足がすくんだといいます。

また、半藤さんが「絶対という言葉を使わない」、「絶対勝利や絶対大丈夫と思っていたけれど全部嘘だった」と話すのを聞いて、岡本さんは戦争がただの昔の話ではなく急に自分のすぐそばにある現実のことに思えて、しばらくは動くことができなかつたといいます。

さらに「世界では今も紛争が続き、平和が壊れてしまう瞬間をニュースで何度も見えています。もしも日本でも同じようなことが起きてしまったらと」考えています。半藤さんとの出会いによって、戦争の怖さが身近なものになっていったことがよくわかります。

【伍藤忠春・昭和館館長】

長崎で平和学習を重ねたものの、戦争は遠い世界の出来事と思っていたところ、半藤さんのオーラルヒストリーである日が近く思えたという率直さ、正直さ。

「絶対」という言葉を使わないという半藤さんの後半生の生き方を的確に理解している。

平和の尊さを「自分の言葉で」伝えられる人になりたいという強い意志を感じた。